

イギリス革命期の東部沼沢地における農民運動(2)

武 暢 夫

前稿⁽¹⁾では、市民革命前の東部沼沢地において農民経済のブルジョア化と領主経済のブルジョア化がそれぞれ特有の形態で相互に対立しつつ発展し、さらに、領主経済のブルジョア化の発展は一七世紀前半の大規模な干拓に帰着し、農民経済の存立基盤そのものを脅していたことが明らかにされた。本稿では、これにたいする農民の抵抗運動の具体的な経過を検討し、その意義を明らかにしようと思う。

注 (1) 拙稿「イギリス革命期の東部沼沢地における農民運動(1)」——『富大経済論集』第十六卷 第一・二号、一〇二九ページ(以下、「前稿」と略称)。

一、市民革命前の時期における農民運動

前稿でのべたように、当地域での領主経済のブルジョア化は領主放牧権の復活という形で始まり、それはすでに生じていた共同地不足を深刻化させ、農民経営を圧迫した。⁽¹⁾それゆえ、領主と農民の対立はまず領主放牧権の問題をめぐる表面化する。表一は放牧権をめぐる領主と農民の紛争の事例を示すものである。それによれば、この段階での農民運動の特徴はほぼ次のように要約されよう。

(1) 農民の主要な要求は領主放牧権の排除と共同権の確保にあったと思われるが、大抵の場合、農民の闘争は財務裁判所 Court of Exchequer への提訴等の形で合法的に行なわれ、いすれも領主の部分的開込とその代償としての領主放牧権の廃棄という形で落着いた。それは領主による共同地の部分的収奪とその領主私有地への転化を意味する。

(2) しかし、Cotonham の場合に農民の共同権が保証され、マナー法廷ないしは領主の意志にたいする村法の独立性と優越性が確認されたこと、また、Stretham の場合に膳本保有農と小屋住農の保有権が保証され、保有容認料の固定と村法作成の自由が確認されたことは、領主権の後退と農民の共同権および土地保有権の強化を意味するものである。

(3) Stretham の場合に農民の共同地分割の要求を領主が認めるべきことが確認されたことは、農民の共同権擁護の要求がすでに単なる共同権の維持それ自体にとどまるものでなく、共同地の分割³⁾私有化、すなわち農民的土地所有確立の要求に発展しつつあったこと、いいかえれば、沼沢地という特殊な環境にあつても、農民層のブルジョア的發展の進行はやがて個別経営の要求と農民的土地所有確立の志向を生ぜしめることを示すものである。

(4) すでに農民經濟のブルジョア化の發展そのものが農民層内部に利害の対立を生ぜしめるのであるが、領主放牧権の復活もその代償としての領主の囲込も富農にこれを賃借することによって農業経営を拡大する機会を与えるものであり、領主と一部の借地農が共通の利害關係を結ぶこともありうる。⁵⁾しかし、領主放牧権をめぐる紛争においては、殆んど農民が一致して領主に対抗しているのであり、農民層内部に利害の対立をはらみながらも、ここでの主要な対立は領主およびそれに結びついた一部の借地農と共同権を有する農民層一般の間にあつたといえよう。⁶⁾

かくして、領主放牧権の復活をめぐる紛争の結末は領主經濟のブルジョア化と農民經濟のブルジョア化のいずれにも応じる面をもっており、このような形で一応の落着をみたことは領主と農民の対立がなお決定化するまでにはならず、両者の力關係がほぼ拮抗していたことを示している。

しかし、王権に依拠した大規模な干拓が進められるとともに農民運動の様相はかなりちがってくる。表二は三〇年代までの時期における干拓反対の農民運動の経過を示すものである。まず、一六二〇年代までの時期においては沼沢地住民と干拓業者の間の紛争の事例が若干みいだされるものの干拓をめぐる紛争は部分的・散発的であり、農民の抵抗も主として合法的な形態で行なわれ、公然かつ全面的な反乱に発展するにいたらなかった。それは、おそらく、この時期の干拓事業の進行テンポがなお緩慢であつたことによるものと思われる。しかし、一六二九年、チ

表1. 領主放牧権をめぐる紛争の事例

場 所	時 期	経 過
Cottonham (ケンブリッジ州)	1580~96	共同権者, 財務裁判所 (Court of Exchequer) へ領主を提訴。 〔調停案要旨〕 1. 領主 (Sir W. Hinde 等) に対し, 共同地の1部を囲い込み, 領主の専用地とすることを認め, 領主放牧権を禁止。 2. 共同権者の確定と共同地等にたいする彼等の権利の確認。 3. 共同沼沢地等の運営のための村法の制定に参加する各マナーの膳本保有農の代表は領主の指名により選出される。 4. マナー法廷にたいする村法の独立性, 領主の意志にたいする村法の優越性の確認。
Stretham (ケンブリッジ州)	1597~ 1607	共同権者, 領主を財務裁判所に提訴。 〔調停案要旨〕 1. 膳本保有農と小屋住農の保有権の保証 (当該保有地が旧置营地であるときも, 領主の請求権を否認する)。 2. 保有容認料 (fine) の引き上げを禁止。 3. 領主 (Sir M. Sandys) に対して100 a を囲い込み領主専用地とすることを認め, 残り1600 a の共同地での放牧を禁止する。 4. Stretham および Setford 村の共同権者が前記共同地の分割を願うならば, 領主はこれに同意すべきである。 5. 共同権者に対して, 共同地運営のための村法作成の自由を確認。
Willingham (ケンブリッジ州)		前記2教区とほぼ同様の経過を経て領主が専用地として囲込を認められ, 代りに領主放牧権を放棄。
Holland Fen (リンカン州)	17世紀初	Kirton郡の諸村落民, 領主を共同権侵害の件で財務裁判所に提訴。 〔判決〕 Swinesheadの領主 (H. Pelham), 480 a の囲込を専用地として獲得し, 代りに領主放牧権を放棄。
Heckington Fen (リンカン州)		1620~30年代, 領主と農民の間に紛争。 1635年, 領主, Swineshead の Lady Lockton と Burton Pedwadine の村民の放牧権を買収, 共同地600 a の囲込を条件に, 領主放牧権を放棄。 共同地は2330 a から1733 a に減少。
Wildmore Fen (リンカン州)	1630年代	領主および領主放牧権の賃借人による過剰放牧をめぐる領主と農民の対立激化。 農民, 領主の家畜を放逐。 領主の1人, 領主放牧権の代償に180 a を囲込むことを提案し, 農民の反対により実現せず。

表2. 1630年代の干拓をめぐる紛争の経過概要

1606年	Cambridg西部の住民, 外国の干拓業者が干拓事業に加わることに反感を表明.
1616年	1600年の全般的干拓条令の施行をめぐり, 沼沢地住民と干拓者の間に紛争.
1620年2月	水路官会議, Ouse川とGranta川沿岸の住民のために, 彼等の土地が前記条令から除外されるよう請願.
	Bishop of Ely の他の水路官, Isle of Ely の南部の住民のために上記と同様の請願.
	Granta 川東岸, Cambridg と Ely の間の住民, 大法官 Verulum に同様の請願.
1629年	ノーフォク州のKing's Lynn の会合において Verumuyden との契約を提案. 沼沢地住民の反対により放棄.
1632年	ハンチンドン州のHolm Fenに反乱. 農民, 武装し, カンパニー (特に Th. Treise) の立ち入りを妨害, その家畜を追放. 治安判事 Mr. Castle of Glatton, 反乱に同調.
	ケンブリッジ州 Over の農民, Sir Miles Sandys の干拓に反対して Privy Council に請願.
1633年	ノチングラム州の7教区の住民, Vermuydenの干拓事業による損害を年£1500 と訴える.
	ヨーク州の Finlake と Sicklake の住民, Verumuyden の干拓による窮迫を訴える.
1637年	ケンブリッジ州の Wicken に反乱. カンパニーの立ち入りを妨害. Peter Jarvis (Constable) 反乱に同調.
1638年	ケンブリッジ州の Ely に反乱. 干拓地の垣, 溝うちこわされ, 「Constable をたすける任務にある数人のものまで」反乱に同調.
1639~40年	リンカン州のリンゼイ伯の領地に反乱. 垣がこわされ, 伯の人夫・代理人の立入妨害される. 「数人の悪意ある人々が下層民を煽動し, 自らも」参加 (リンゼイ伯の言).
1630年代	ノチングラム, ケンブリッジ, リンカン, ヨーク, ノーフォクの5州において沼沢地住民の実力行動20を数える.

四

Darby, *The Draining of the Fens*, pp.39, 50~51, 55~56, 61~62.
 アルハンゲリスキー『17世紀の40~50年代のイギリスにおける農民運動』
 53~55ページより作成.

ヤールズ一世が自ら干拓事業に介入することを宣言し、以後、干拓事業が本格的に進められるとともに事態は変化していった。すでに一六二九年、チャールズ一世の命令によって干拓事業遂行のために新たに設置された委員会がノーフォークの King's Lynn に会合し、オランダ人 Vermuyden に事業を請負わせることを提案したとき、沼沢地住民は直ちに反撃し、この提案を放棄せしめた。⁸⁾そして、三〇年代に入って干拓に反対する農民の闘争は激しい実力行使を伴う公然たる反乱に発展していったのである。⁹⁾他方、一六三五年の船舶税 Ship Money の復活を始めとする絶対王制の反動的諸政策はイギリス全土にわたって広汎な階層の反撥をよび起し、John Hampden の指導した船舶税支払拒否闘争は沼沢地にも広まっていた。¹⁰⁾このような革命的情勢の発展が沼沢地の農民運動をさらに高揚せしめたことは容易に推察されよう。当時の沼沢地の情勢について、一六三八年六月、ケインブリッジ州の Isle of Ely の治安判事はこの地域の反乱に関する報告の中で「各村落は相互に秘密に連絡をとり合っている」とのべ、Wiltontons Sir Miles Sandys は「秩序が回復されなければ全般的な反乱に発展するだろう」とのべている。¹¹⁾干拓反対の農民運動が全般的な反乱に発展しつつあったことを示すものであろう。

このように、三〇年代の運動はその闘争形態の激しさと規模の拡大という点で以前よりも発展したことは明らかであるが、運動の目標は領主による共同権の収奪を排除して、共同権を奪還することであり、その点では領主放牧権をめぐる紛争の場合と本質的に異なるものではない。しかし、領主放牧権をめぐる紛争では主要な対立は領主と農民層の間にあったのにたいし、ここでは中・小領主層の中に反乱を支持する者が現われるというように農民運動における階級関係が変化している。最も顕著な例をあげると、ケインブリッジ州の Ely およびハンチンドン州の Holm Fen の干拓に際して、独立派の指導者オリヴァ・クロムウェルは干拓者のマンチェスター伯爵等に対抗して農民の共同権擁護の訴訟を引き受け、これを勝訴に導いた。¹²⁾また、前記の Holm Fen で一六三二年に住民の反乱が

生じたとき、治安判事の職にある Mr. Castle of Glatton は公然と反乱を支持した⁽¹³⁾。そして、同様な事例は表二の中にも幾つかみいだされよう。前稿でのべたように、三〇年代における干拓事業の部分的完成とともに、干拓地の分配をめぐる国王ならびにこれに結びついた特権的大地主層と中・小領主層との間に利害の対立が生じていたのであるが、先の事例は干拓の利益配分にもれた中・小領主層の不満の強さを端的に示すものであろう。かくして、三〇年代の干拓事業に反対する農民運動においては本質的には対立関係にある農民層と中・小領主層の間に一時的な利害の共通性に結ばれた同盟関係が成立し、農民運動の主要な攻撃目標は王権につながる特権的大地主層におけることになったのである。

注 (1) 「前稿」、一三、一七〜一八ページ参照。

(2) 表一にあげた事例のうち Wildmore Fen の場合は領主放牧権による家畜が農民によって放逐されるといった実力行使の例がみられる。おそらく、それはここでは領主放牧権が特に顕著に行使され、共同放牧地の不足を深刻化せしめたからであらう (Thirk, J., *The English Peasant Farming*, 1957, pp. 113〜115 参照)。

(3) 同様の事例は表一にあげた Heckington の場合にもみられる。すなわち、ここでは一六三五年財務裁判所の判決が下されたとき、裁判所の調停委員は Sleatford の住民に面接試問して、沼沢地の分割が保有者の一般的利益であることに意見一致し、耕地一エーカーにつき一エーカーの沼沢地、および一農家につき五エーカーの沼沢地を割当てるべきものとした (*Ibid.*, pp. 115〜116)。当地域の農民経済の発展の中から共同地分割、私有化の志向が生じつつあったことを示すものであろう。

(4) 例えは、前記注(3)の事例において四〇人の下層農民が反対したといわれ (*Ibid.*, p. 115)、農民層分解の進行とともに農民層内部に利害の対立が生じてきたことを示している。しかし、農民は少なくとも領主放牧権の復活に反対するかきりで一致したことが忘れられてはならない。

(5) 領主放牧権の借地については、*Ibid.*, pp. 113〜114 参照。領主放牧権の代償として賄いこまれた土地がどのように利用されたかについて具体的な事例を示しえないが、かかる囲込の貸出は大いにありうることである。表一にあげた Cottonham の場合、紛争は一五八〇年この教区の領主 Hinde と一部の借地農に有利な協定が結ばれたことが発端となっており、放牧権

や開込の賃貸借という形をとったか否かは別として、領主と一部借地農の間に或程度の結びつきのあったことを示している。

(6) *Stretam* の場合、一六〇七年の判決において「過半数の共同権者」の同意によって村法が成立しうることを認められたのにたいして、一六〇九年、一部の共同権者が損害を蒙ったとして財務裁判所に提訴し、先の判決に手直しがなされている。これら共同権者の不満が「十分な数の労役用の牡牛・牡馬を飼うことが不可能となった」点にあることからみて、彼等は富農層に属するものと推察される。このことは領主放牧権に反対する共同権者「農民層がすでにブルジョア化しつつある農民層であり、彼等は内部に利害の対立をはらみながらも領主・借地農にたいしてはなお一致して対抗したことを示している。このような関係は沼沢地域のみならず他の地域においても共同権をめぐる領主と農民の間の紛争の中で広くみられるところである。

(7) 「前稿」二〇～二二ページ参照。

(8) *Darby, H. C., The Draining of the Fens, p. 39.*

(9) このような反乱は、一六三〇年代、ノチンガム、ケンブリッジ、リンカン・ヨーク、ノーフォークの五州において二〇を数え、反乱の大多数は一六三六～三八年に生じたといわれる(エス・イ・アルハンゲリスキー『一七世紀の四〇～五〇年代のイギリスにおける農民運動』—*Архангельский, С. И., Крестьянские движения в Англии в 40—50х годах XVII века, Москва 1960, — 五五ページ*)。

(10) 例えは、一六三九年、ケンブリッジ州の *Isle of Ely* では二〇ポンドの徴収が不可能であったといわれる(*Darby, The Draining of the Fens, p. 63*)。

(11) *Darby, The Draining of the Fens, p. 61.*

(12) *Ibid.*, pp. 56, 63～64.

(13) *Ibid.*, p. 55.

(14) 「前稿」二二～二三ページ参照。

二、市民革命期における農民運動

I 一六四〇年代の農民運動（共和制の成立まで）

まず、市民革命の時期における農民運動の経過を示すと、表三のごとくである。⁽¹⁾ それによって、市民革命の勃発とともに沼沢地における干拓反対の農民運動が一段と高揚したであろうことが推察されよう。⁽²⁾ 地域的にみると、反乱はリンカン、ハンチンドン、ノーフォーク、ケインブリジ、ノーサンプトン、ノチンガムの諸州にひろがっているが、これをさらに細かく検討すると、四〇年代の反乱の主要な舞台となったのは次の諸地域であった。すなわち、

- (1) 国王領（リンカン州東部の Bolingbroke 近くの沼沢地、リンカン州北部の Epworth Manor）、
- (2) 王妃領（ハンチンドン州の Halliwell, Needingworth, St. Ives の間の土地および Somersham、ノチンガム州の Bol-derstone）、
- (3) リンゼイ伯領（リンカン州の Kyme 川と Bourn 川の間、Little Hale Fen, Horbling, Bos-ton, および Lindsey Level といわれる低地）、
- (4) ベドフォード伯領とポートランド伯領（ケインブリジ州の Whittlesea）、
- (5) ナイトの Killigrove の領地（リンカン州の Kyme 川と Bourn 川の間）、
- (6) オランダ人干拓業者 John Van Hendorp の領地（ノーフォークの Holm と Teonham）等である。これらの領地はいずれも国王、王妃ならびに王権に結びついて干拓事業を主導してきた特権的大地主に属するものであり、それゆえ、かかる階層が四〇年代の農民運動の主要な攻撃目標であったことが明らかである。

次に、反乱者側の事情についてやや立ち入って検討しよう。当時の記録は、多くの場合、反乱者を共同権者 *commoners* と称し、また、「反乱を起した不穏な人民」、「マナーの住民」、「村落の住民」、「種々の人民」、「若干の人々」等々さまざまな名称で表現しているが、そこから、農民層を中心として種々の階層が反乱に参加していたことが推察される。また、表三に示された闘争形態および反乱参加者の人数からも四〇年代の農民運動が激

烈であり、かつ、かなりの規模に達していたことがうかがわれよう。さらに、これらの反乱は地域毎に一定の中心地と指導者を有していた。⁽⁴⁾これらのことは四〇年代の農民運動がかなりのエネルギーと一定の組織性をもってたてられたことを示すものであらう。

農民運動の要求の性格についていえば、個々の反乱における農民の主張を詳細に知りえないという不十分さは残るが、農民の意図するところは運動の経過からおおよそ推察することができる。すなわち、反乱の生じた場所では殆んどどこでも干拓施設や干拓地を囲い込んだ垣の破壊、干拓地内の家屋、作物、農具等の破壊が行なわれ、干拓地内で放牧が復活されるに及んで農民の行動はいちおう終結しており、農民は共同地の奪還、放牧の復活をもって反乱の目標を達成したと考えていたものと思われる。この点について、リンカン州北部における反乱の中心地であった Epworth Manor では一六四二年六月、四三年三月、四七年十一月の反乱においていずれも開放された干拓地で放牧が復活されたが、反乱の指導者の一人である R. Starky は「われわれは法律によってわれわれの共同地を回復することができないのなら、それを力の掟によって獲得するまでだ」⁽⁵⁾として、明確に彼等の意図をのべている。かくして、四〇年代の農民運動の目標は以前に農民層が共同権を有していた土地を奪還し、共同地を基盤とする牧畜経営を復活・発展せしめることであり、それ以上の要求は見いだされない。それゆえ、四〇年代の農民運動は三〇年代の運動と基本的には同じ次元に立つものといえよう。

それだけでなく、四〇年代の農民運動においてジェントリの一部が積極的に反乱に参加していたのも三〇年代の農民運動にみられたのと同じ特色である。例えば、リンカン州北部の反乱の中心地であった Epworth Manor の闘争を指導したのは治安判事の John Allen (後に弁護士 Noddel) であり、当州東部の反乱の中心であったリンゼイ伯領 (Kyme 川と Bourn 川の間の) の反乱において、治安判事の Loecton はこれを支持していた。⁽⁶⁾このように

における農民運動の経過の概要

サッシュンドン州	ゲオジブリジ州	ノチシガム州
<p>41. 4. 16 Somersham, Needingworth, St. Ives, Halliwell の諸マナー（王妃領）に反乱。 垣と垣の破壊。</p> <p>41. 5. 5 「蜂起者」破壊を続行。 上院、主たる蜂起責任者の喚問を命令。</p> <p>41. 5. 17 「これらマナーの多くの住民」、上院命令を拒否、使者に暴行。</p> <p>62年 4月 Somersham に反乱、囲込破壊。</p> <p>63. 3. 13. Somersham に新たな反乱。</p>	<p>41. 4. 22. Whittlesey (ベドフォード伯とポートルランド伯領) で、「反乱を起した不穏な人民」、垣と堤をこわし、放牧。 上院、「平穏な領有」を命令。</p> <p>43. 5. 15. 「J. Boyse, その他Whittlesey およびそれに接する村落の約1,000人」、領地、家屋、垣、水門の破壊、穀物の奪取。 議会軍の派遣。</p> <p>53. 4. 20. SweffhamとBotsgham に150人の集会、干拓労働者を追放。</p>	<p>42. 5. 4. Bolderstone の南沼沢地（王妃領）で、「自分の共同権をもつ Bolderstone の住民」、垣の破壊、囲込地への侵入、放牧、地代支払を拒否。 上院、「平穏な領有」を命令。</p>
		<p>ノーフォーク州</p> <p>42. 6. 13 Holm (オランダ人J.V. Hendongの領地) に反乱、穀物奪取、垣の破壊。 上院命令の侵犯。 上院、命令を輕蔑する者を喚問。</p> <p>43. 3. 7. Holm と Teonham (上記 Hendong領) に反乱、垣の破壊。</p> <p>53. 5. 2. Stoke, Wirgham, Breton に反乱。</p>

『農民運動』, 110~116, 254~266, 293~298ページより作成。

表3. イギリス革命期の東部沼沢地

リンカン州南部	リンカン州東部	リンカン州北部
<p>41.2.22 Stamford (エクゼタ伯領)で「種々の人民」蜂起, 干拓施設を破壊</p> <p>41.4.6 Kyme 川とBournの間(リンゼイ伯領)で「若干の人々」, 垣と堤をこわし, 放牧, 地代支払拒否。 上院「平穏かつ平和的領有」を命令。</p> <p>41.4.19 蜂起者, 上院命令拒否。</p> <p>41.8.25 蜂起者, 責任者の喚問に関する上院命令を拒否。</p> <p>41.6.8 Ouse川の北東岸で, 「若干の人々」, 水門, 建物, 垣, 溝渠等をこわし, 放牧し, 地代支払を拒否。</p> <p>41.11.8 ナイトの Killigrue の領地で反乱, 穀物奪取される。蜂起者投獄され, 責任者処刑される。</p> <p>42年3月 Horbling(リンゼイ伯領)で, 「共同権者」, 領地に侵入, 垣をこわす。 Little Hale Fen(リンゼイ伯領)で, 「C. Aquiwell と共同権者と称する他の者」, 垣や領地をこわす。</p> <p>45.12.10 Sutton (王領地)で, 「Sutton, Lutton 村に住む種々の人々」, 垣と堤の破壊を脅迫。</p> <p>59.3.2 州南部の11村からの請願。</p> <p>59.6.29 同様の請願。</p> <p>63.5.1 Wildmore Fenに反乱。</p>	<p>41.4.17 East, West & North Fen (王領地)。</p> <p>41.7.3 Thomas 卿夫人の領地で反乱。 上院, 責任者の喚問を命令。 蜂起者, 上記上院命令に服従せぬむね言明。</p> <p>41.12.3 Bolingbroke (王領地)で, 「共同権者」, 厩込を破壊, 穀物, 乾草等を奪取, 家屋焼却を脅迫。 土地を奪還。 上院, 奪われた物品の返却を命令。 上院「犯罪者」所罰を命令。</p> <p>42年4月 「J. Percy 他 300人」, 水路, 作付地を破壊。 上院指令を嘲笑。 「J. Percy 他 1,000人」 Boston に蜂起者を逮捕した州知事, 治安判事の住居を攻撃。</p> <p>42.5.9~42.5.13. Lindsey Levell (リンゼイ伯領)で, 「民衆」, 蜂起, 集会, 干拓者の追放, 施設と住居の破壊。</p> <p>42.5.23. 「1,000人以上の蜂起大衆」, 干拓施設の破壊, 家屋に放火, 破壊, 抵抗する者を川に投げこむ。 若干の蜂起者逮捕される。</p>	<p>42年6月 Epworth Manor (王領)で, 「J. Allen 他 16人」, 垣, 干拓地, 家屋をこわし, 強行放牧。</p> <p>43.4.11. 「Epworth Manor の住民」, 作付地の破壊, 抵抗者を傷害。 上院, 民兵と議会軍の援助を要請。</p> <p>47.11.8. 「若干の人々」, 垣をこわし, 放牧し, 乾草を奪取。</p> <p>49.6.25. Hatfield Chase の農民の請願, 干拓の再開を攻撃。</p> <p>50年 Epworth Manor に反乱, 垣の破壊, 平等派の参加。</p> <p>51年 上記の蜂起者, 財務府と議会への服従を拒否, 新議会を要求。</p> <p>56.12.1. フランス, オランダの新教徒の教会うちこわされ, 脅迫される。</p> <p>56年12月 Hatfield Chase からの2つの請願(農民側と干拓者側と)。</p> <p>60年12月 Hatfield Chase の農民の請願。</p> <p>61年5月 Hatfield Chase に反乱。</p> <p>62年3月 Hatfield Chase に反乱。</p>

公然と反乱に参加しないまでも、多くのジェントリは少なくとも動揺していた。例えば、一六四七年六月の四季裁判所 *Fpworth Manor* の反乱に参加した二四人が裁かれたとき、法廷は干拓者の側に立ったが、同じ年の一〇月には法廷は一転して反乱の指導者 *Noddel* を支持し、干拓者の土地所有を不法と判定するという状態であった。^① 干拓の利益配分をめぐる中・小領主層の根強い不満に加うるに、後に詳述するところであるが、内戦の時期における特殊な政治状況を考え合わせてみれば、中・小ジェントリがこのような行動に出たのもうなづけることである。かくして、四〇年代の農民運動における主要な対立は、三〇年代と同じように、国王およびそれに連なる特権の大地主層と農民層およびこれと一時的同盟関係に立つ中・小ジェントリの間にあったといえよう。

ところで、以上にのべたのは沼沢地農民運動のそれ自体としての特徴づけであった。だが、この農民運動の攻撃目標が国王およびそれに結びついた特権の大地主層にあり、さらに、沼沢地が特殊な戦略的重要性を有していたという事情によって、沼沢地における農民運動はイギリス市民革命の展開過程においてかなり重要な意味をもつことになる。そこで、この運動がイギリス革命においてどのように位置づけられ、いかなる役割を果たしたのかが問題にされねばならない。この問題はイギリス革命における全体としての階級関係をほぼ代表すると思われる諸党派ないし諸勢力と農民運動との関係を検討することによって或程度まで明らかにされよう。イギリス市民革命における全体的な階級関係を大づかみにいうと、それはまず第一に議会派と国王ならびに王党派の対立として現われ、革命の進行するとともに議会派内部に対立が生じてくる。それは、(1) 上院と下院との対立、(2) 下院における上層部(長老派)と下層部(独立派)ないし議会軍との対立、(3) 議会軍内部における上層部(独立派)と下層部(平等派)との対立として現われる。以下、これら諸党派ないし諸勢力と沼沢地における農民運動との関係を検討することにしよう。

まず、国王ならびに王党派と農民運動との関係は明らかである。農民運動の当面の攻撃対象となった特権的大地主層はその殆んどが王党派に属し、あるいは少なくとも王権に結びついて干拓を主導してきたのであり、したがってかかる特権的大地主層を攻撃することは国王ならびに王党派と決定的な敵対関係に立つことを意味する。かかる意味において沼沢地における農民運動は、農民層がそのことを明確に意識する与否とを問わず、市民革命期における絶対王制打倒の闘争の一環を成し、議会派の同盟軍としての役割を果たすものであったといえよう。

上院は旧秩序のもとでの支配階級の上層部を代表し、革命の初期の段階においては国王にたいして批判的な立場をとったが、基本的には変革を好まず、国王との闘争においては最も妥協的であった。しかも、農民闘争の主要な攻撃対象となった特権的大地主層はまさに上院が代表する階層に属するものであり、時には上院のメンバーそのものであったから、表三にみるように、全政府機構をあげて農民闘争を弾圧し、干拓者の利益を擁護しようとし、これにたいして、農民層は公然と上院の命令に従うことを拒否し、実力をもってこれに対決したのであった。しかし、革命が発展し、主導権が下層部に移っていくとともに、保守的な上院の権威は失墜し、上院の命によって農民闘争の鎮圧に当るべき政府諸機関の中にも動揺が生じ、上院の命令はしばしば無視され、ついには、絶対王制の打倒とともに上院そのものが廃止され（四九年三月）、王政復古によって復活するまで姿を消すことになった。かくして、四〇年代の農民闘争において沼沢地農民層と上院とが決定的な敵対関係にあったことは明らかである。

下院はジェントリが圧倒的部分をしめ、貴族、法律家、商工業者の階層が若干の比率をしめていたが、大まかにいうと、下院の中で最も保守的・反動的な部分は国王派に投じ、議会派にとどまった議員の中では長老派に代表される上層部（大ジェントリ、大商人、金融業者）は内戦の過程でも常に国王との妥協を求めていたのに対し、独立派に代表される下層部（中・小ジェントリ）はより非妥協的であった。下院内部におけるかかる対立は干拓をめぐ

る領主階級内部の対立、すなわち、干拓を主導した特権的大地主層と干拓の利益配分に恵まれなかった中・小ジェントリの間の対立にまさに照応するものであった。それは、長老派と独立派のそれぞれを代表するマンチェスタ伯とクロムウェルの対立に典型的に現われているといえよう。この二人がすでに三〇年代においてケインブリッジ州の Ely およびハンチンドン州の Holm Fen の干拓をめぐる対立したのは前述のとおりであるが、革命期においても内戦の進め方をめぐって両者は再び対立することになった。すなわち、マンチェスタは一六四二年十二月に議会軍再編の第一段階として組織された東部連合軍司令となりながら、常に日和見的で、和平に走ろうとしたのになんて、クロムウェルは自らニュー・モデル軍を編成して内戦の勝利を求めたのである。この対立の当初は下院内ではマンチェスタを始めとする妥協的な長老派が優勢であったが、四五年二月の下院で「辞退条令」が成立するに及んで、軍隊に依拠するクロムウェルおよび独立派が優位をしめるようになった。¹²そして、内戦における議会軍の軍事的優位が増大するとともに、革命の主導権は下院から軍隊に、長老派から独立派に移っていったのである。ともかく、干拓者の利害を代表する下院上層部・長老派に對立するという点では独立派と沼沢地農民層の立場は一致していた。しかも、この地域は議会派の最も重要な地盤であった東部諸州の前面にひろがり、軍事的に重要な位置にあった¹³だけでなく、独立派の指導者であったクロムウェルは実にこの地域を基盤として勢力を拡大したのであり、したがってまた、ニュー・モデル軍の中核となった彼の鉄騎兵 Ironside もこの地域を基盤として形成されたという特殊な重要性をもっていた。このような事情を考えてみれば、独立派がこの地域の農民運動には特に慎重に対処せねばならない立場にあったことは容易に推察されよう。これにたいして、下院上層部、特に、干拓事業に關係した者は沼沢地農民層と直接的に對立する關係にあったわけであるが、前述のような情勢のもとで彼等の個別利害を貫徹することはできなかったといつてよいであろう。

このような事情によって、農民運動にたいする下院の態度は曖昧なものとならざるをえなかった。例えば、一六四一年五月、ベッドフォード伯によるGreat Fen（リンカン、ケインブリジ、ハンチンドン、ノーフォーク、サフォークの諸州にまたがる）の開拓に関する法案は下院の反対を受け、また、同年六月、一四〇〇〇エーカーの開拓地をリンゼイ伯と保有者に分割するむねの上院命令を發布する案が下院に提出されたとき、下院議長Guy Palmesはこの分割が幾千の人々の利益を損うものと言明している。⁽¹⁵⁾おそらく、このような農民層に同情的とも見える態度は下院内部の利害対立と政治的配慮から生じたにすぎず、それは後の経過からも明らかである。しかし、上院と対立した農民はごく素朴に下院に支持を求めようとした。例えば、リンカン州のナイトKilgrieveの領地で蜂起した農民は上院の命令を拒否したが、下院の命令に従うことを表明し、同じくリンカン州のリンゼイ伯の干拓に反対した農民は下院に送った請願の中で干拓者avanturistが上院の命令を楯にとつて下院の権限を犯していると訴え、⁽¹⁶⁾下院の同情をえようと努力していることが推察されるのである。

さらに、沼沢地の農民層は革命の主導権を掌握した軍隊にも支持を求めようとした。例えば、四十七年七月、リンカン州のEpworth Manorの反乱の指導者であつたR. Starkyは議会軍の指揮官トマス・フェアファックスの支持をえたかのようにのべ、⁽¹⁷⁾彼らが軍隊を頼みにしていたことを示している。しかし、この軍隊は、独立派のジェントリが幹部をしめ、兵士は農民を主体とするというように階層的に編成されていた。⁽²⁰⁾そして、平等派の進出とともにその影響は兵士等の間に急速に広まり、独立派・軍幹部と兵士・平等派とはその階級的基盤が異なるとともに政治的・社会的改革の主張においても鋭く対立していったのは周知のところである。⁽²¹⁾それゆえ、平等派はその階層的基盤からして沼沢地農民層の利害を代表すべき政治勢力であつた。実際、平等派の要求の中で沼沢地の干拓を廃棄すべきことを主張している点は沼沢地農民層の要求を直接的に代弁するかのごとくである。⁽²²⁾しかし、これをもって当

地域の農民運動と平等派運動が直接的に結合していたということはできない。平等派運動はもとと都市的要素を中心として発展し、その要求は政治的改革の問題を中心としており、運動の発展とともに平等派のパンフレットの中にも農業問題に関する具体的要求が現われてきたが、それは、おそらく、農民出身の兵士・平等派あるいは農村平等派の影響によるものであろう。²³特に、兵士層は平等派運動の最も強力な基盤であり、平等派運動と農民運動を結びつける接合点であったともいえよう。しかし、実際には、兵士等の関心は次第に政治問題に集中し、農民本来の意識をうすくしていったように思われる。²⁴その結果、平等派運動と個々の農民運動が結びつく道は失われ、革命期のイングランドでは沼沢地を始めとして各地で激烈な農民運動がたたかわれたにもかかわらず、そのエネルギーを平等派運動に結集せんとする努力は殆んどみられなかったのである。

この点を農民運動の側からみると、沼沢地農民層の共同権回復の要求は単なる共同権の維持それ自体にとどまらず、農民的土地所有確立の要求に発展する性格を内包するものであった。²⁵そして、この要求は農民層の利害を代表する政治権力の確立によって達成さるべきものであることはいうまでもなく、かかる意味において、沼沢地農民運動は平等派の人民主権確立のための闘争につながる可能性をもっていた。しかし、現実には農民の行動は共同地の回復、放牧の復活にとどまり、それ以上の発展はみられず、また、個々の反乱は地域的な枠をこえて統一されることなく、局地的・経済的闘争に終始したのであり、そのような闘争において、農民層は下院や軍幹部に支持を求め、それが本質的にはジェントリの利益を代弁し、自らに敵対する勢力であることをなお認識しえなかったのである。これらのことは四〇年代の激烈な農民運動の過程においても沼沢地農民層の政治意識がなお低い段階にあったことを示している。しかも、外部から働きかけてこのような限界を克服すべき政治勢力である平等派もそれだけの力量を欠くという状況のもとでは、沼沢地の農民運動は目的意識的な政治闘争に発展すべくもなかったといえよう。²⁶

かくして、四〇年代の沼沢地における農民運動は革命期の権力闘争に積極的・主体的に関わることなく、地方的な運動に終始した。他方、革命の主導権を獲得した軍隊内の独立派と平等派は、内戦が議会軍の勝利に終り、チャールズ一世が処刑され（一六四九年一月）、共通の攻撃対象が消滅するに及んで決定的に対立する。そして、かかる政治状況の変化とともに沼沢地における農民層と中・小ジェントリの一時的同盟関係もその根拠を失うことになったのである。

注 (1) 市民革命期における農民運動の具体的経過についてはエス・イ・アルハンゲリスキー『一七世紀の四〇—五〇年代のイギリスにおける農民運動』に負うところが大きかったことをこわつておきたい。

(2) 当面の時期においては干拓を伴わない開込もなお部分的ながら進行しており、このような開込も農民のうちこわしの対象となった。例えば、ハンチンドン州の Buckenden におけるリンカン僧正 Bishop of Lincoln の開込は干拓事業と関係なしに行なわれたが、一六四一年、蜂起した農民によってうちこわされ、上院はメンバーの一人として彼を保護しようと尽力したといわれる (Cunningham, W., *The Growth of English Industry and Commerce*, Pt. I, p. 118 n. 1 参照)。おそらく、このような事例は他にもあるだろうが、一六三〇年代から市民革命期の農民運動における主要な争点が干拓にあったことは明らかである。

(3) 表三はアルハンゲリスキーの表を再編成したものであるが、その基礎となった史料は Journals of the House of Lords, Calendar of State Papers, Historical Manuscripts Commission, IV Reports 等である。表三ではこれらの記録における反乱者の呼称は「」で示されている。

(4) 反乱が最も広汎かつ頑強であったリンカン州の場合、南部の中心地は Stamford と Sutton で指導者は Makersnes なる者、東部では Bolingbroke と Boston を中心として John Pacey に指導され、北部の中心はリンゼイ伯領と Epworth Manor でそれぞれ治安判事の Loecton と John Allen (後に弁護士 Daniel Noddel) が指導者であった。他の諸州について詳細は不明であるが、ケンブリッジ州の Whittlesea では J. Boyse が指導者として現われている。このうち Makersnes, Pacey, Boyse 等の出身階層は明らかでないが、北部の指導者の Allen と Noddel はジェントリである。しかし、北部の Epworth Manor の反乱において四十七年六月の四季裁判所で二十四人の反乱首謀者が裁かれたが、これらの指導者はすべて農民であつ

たといわれる。これらの点については、アルハンゲリスキー『前掲書』二〇二—二〇七ページ参照。

(5) アルハンゲリスキー『前掲書』一〇六—一〇七ページ。

(6) 同右、二〇二ページ。

(7) 同右、一〇七ページ。

(8) ベドフォード伯の場合はやや例外に属する。すなわち、三〇年代の干拓事業を主導してきたのは父のウィリアムであったが、彼は四一年に死亡し、その後を継いだ息子のフランシスはより柔軟な政治家であつて、革命期には議會派の側にあつてさまよふの事業を営なみ (Clarendon, E. H., *History of the Rebellion and Civil Wars*……, vol. I, book III, p. 25, Stone, L., *The Crisis of the Aristocracy 1558—1641*, 1965, pp. 361, 377.)、そして、五〇—六〇年代の干拓事業に再び主導的役割を果たしたことは後述するところである。

(9) 上院は大貴族および国教会の司教 bishop 以上の僧侶あわせて一〇〇人が恒常的なメンバーであり、かかる構成からしてその保守性は明らかである。

(10) 例えば、地方行政機構の要を成す治安判事が農民運動の高揚を前にして動揺し、あるいは、運動に積極的に参加したことはこのことを典型的に示している。また、一六四二年四月、リンカン州東部の反乱において蜂起した農民が逮捕された者を釈放するためボストン市に州長官や治安判事の家を攻撃したとき、市長は中立を保つという状態であつた (アルハンゲリスキー『前掲書』一〇〇ページ)。

(11) もちろん、これらのグループの個々のメンバーをとってみれば、その出身階層と政治的立場は一義的に照応するものではなく、なお問題が残されてはいるが、ここではその詳細に立ち入ることはできない。しかし、ここで行った分類はごく大ざっぱなものではあるが、従来の研究史に照らしてみても大過ないものと思われる。この点の詳細については、Keeler, M. F., *The Long Parliament*, D. Brunton and D. H. Pennington, *Members of Long Parliament*, Yule, G., *The Independents in the Civil War* 等を参照。また、これらの文献に依拠した研究として、浜林正夫『イギリス市民革命史』一一六—一二六ページ、尾崎芳治『イギリス革命の主体』—『経済論叢』第八六卷第六号五〇—五七ページ等を参照。

(12) 「辞退条令」Self-denying Ordinance はニュー・モデル軍の原則にもとづいて議會軍を根本的に再編し、かつ、軍隊の指揮権を議會から独立させることを目的とするものであり、その成立は次のような意義をもつ。すなわち、第一に、東部連

合軍になお根強く残存していたローカリズムを克服し、クロムウェルの主導のもとに議会軍が再編される道が開かれ、第二に、議会にたいする軍隊の独立性が確保され、下院で劣勢であった独立派が軍隊に依拠して長老派に対抗することが可能になったことである。

(3) Darby, *The Draining of the Fens*, pp. 64~66.

(4) Kingston, A., *East Anglia and the Great Civil War*, Chap. I, Abbot, W. C., *The Writings and Speeches of Oliver Cromwell*, Chap. I, Carlyle, T., *Oliver Cromwell's Letters and Speeches*, vol. I, Introduction, and Part I, II等を参照。

I, II等を参照。

(5) アルハンゲリスキー『前掲書』九九ページ。

(6) 同右、一〇三ページ。

(7) 同右、一〇四ページ。

(8) アルハンゲリスキー『前掲書』一〇六〜一〇七ページ。

(9) この点については、尾崎芳治「前掲論文」六九〜七二ページ参照。

(10) 平等派 Levellers なるグループの成立の事情の詳細についてはなお明らかでないが、さしあたり、次のように考えられる。すなわち、平等派の指導者である John Lilburn, William Walwyn, Richard Overton 等が相互に結びついたのは一六四五年の初頃であり、四六年六月のリバーンの投獄、同七月のオーヴァートン逮捕にたいする抗議・釈放の要求の中で平等派のグループが形成され、ちょうど軍隊解散の問題や給料支払遅延の問題をめぐって不満が高まりつつあった兵士層にその影響がひろまっていたものと思われる。

(11) 例えば、一六四八年九月一日付の『謙虚なる請願』(The Humble Petition of divers well affected Persons inhabiting the City of London……)の第二二項目に「最近囲ひ込まれた沼沢地および他の共同地をすべて開放し、ちよくなぐち、貧民のためになるようにのみ囲ひこむようにしてもらいたう」とある(W. Haller and G. Davies, *The Leveller Tracts*, 1647—1653, p. 152)。

(12) このことは平等派の文書を発行された順序を追って点検してみれば明らかとなろう。ここでは詳細な検討の余裕はないが、例えば、平等派の最初の統一した綱領は四七年三月一五日に下院に提出された『人民の最高権力』と題する請願、いわゆる

『平等派の大請願』であるが、そこでは農業上の要求としては十分の一税廃止の要求が掲げられているだけである。それが同年十月十五日発表の『軍隊の主張』(The Case of the Army truly stated……)になると、封建的土地所有の分配(国王・王党派・教会領の処分)、十分の一税の廃止、囲込の開放等を中心に農業上の要求をやや詳しく展開している(Haller and Davies, *The Leveller Tracts*, pp. 65~86)、そして隣本保有制廃止の要求が平等派の文書に現われるのはやつと一六四八年になってからであった。こうしたことは兵士の大部分をしめる農民の要求、あるいは、農村の同調者の影響によって徐々に農業上の要求が平等派の主張の中にくみこまれていったことを示すものであろう。

(24) このことは、例えば、軍隊内における平等派の運動が盛り上りはじめたパトニー会議 Putney Debates で議論のもととなった重要な『人民協定』The Agreement of the People においてまったく土地問題にふれていないこと、また、前記の封建的土地所有分配の問題ももっぱら兵士の給料支払の確保という観点から扱われていること等に現われている。

(25) 「前稿」一三ページ、「本稿」三ページ参照。

(26) 後述するように、五〇年代のリンカン州北部の Epworth Manor の闘争にリルバーン等が参加したことは平等派が以前からこの地域と関連をもっていたでないかとの推測をいだしめる。しかし、もし、四〇年代の闘争に平等派が関係していたならば、運動の要求は何らかの政治性をおびていたであろうが、その痕跡はみられないのである。

Ⅱ 一六五〇年代の農民運動(共和制から王制復古まで)

周知のように、独立派と平等派の闘争は独立派の勝利に終り、一六四九年五月一九日、独立派の共和国が成立する。権力を掌握した独立派の農業政策の要点は、領主の土地所有にたいする封建的諸規制を撤廃し、領主に完全な所有権を与えながら、農民層を無権利のままに放置したことにあるが、沼沢地の干拓に関する政策もまさにこの原則にしたがって遂行された。そのような政策の第一歩として、一六四九年五月二十九日、「Great Fens の干拓に関する条令」Act for the Draining of the Great Fens が制定された。この法律は沼沢地干拓に関する独立派政府の政策の基本をなすものであり、独立派政府の本質をはっきりと示しており、その要旨は次のとおりである。⁽²⁾

(1) ベドフォード伯を長とする「干拓組合」の事業範囲を確定し、完成期限を一六五六年一〇月一〇日とする。⁽³⁾
(2) 干拓地の分配をめぐって事業家相互ならびに他の土地所有者との間に生じた紛争を処理するための委員の任命。委員の中には長期議会の議長であった W. Lenthall、クロムウェル父子、H. Ireton, J. Seladan 等の独立派共和国の重要メンバーを含む。

(3) 以前の干拓委員はこの事業に関与しえず、事業家によって干拓され、彼に帰属した土地は前国王やその相続者のいかなる要求 *pretension* をも免れるものであり、自由保有と見なされる。

(4) 条令によって任命された委員およびベドフォード伯をはじめとする事業家は干拓事業の費用調達のために住民から一定の金額を徴収する権限を与えられ、州長官その他の役人は干拓事業を援助するよう命令される。その他、干拓者にさまざまな便宜を供与することが規定される。

(5) 共同権者即ち農民の権利については何らふれるところがない。

以上のことは、干拓カンパニーがジェントリとブルジョアジーを主体に再編成され、干拓事業の主導権がかつての特権的大地主層からジェントリとブルジョアジーの手に移ったこと、独立派政府が今や地主的・反農民的性格を明らかにし、新しい支配階級たるジェントリとブルジョアジーのために干拓事業を遂行しようとしたことを示している。周知のように、共和制はやがてクロムウェルの軍事独裁たる護民官制 *Protectorate* にとって代られるが（一六五三年一二月）、独立派が権力を掌握し、ブルジョアジーとジェントリの支配体制であることに変りはない。王党派の反革命の危険、長老派との権力争いという事情にもかかわらず、護民官政府は一貫して反農民のであり、四九年の条令にもとづいて干拓事業をおし進めようとしたのであった。

かくして、一六四九年の条令は沼沢地における農民闘争が新たな局面を迎えたことをはっきりと示すものであ

た。これまで農民闘争の当面の攻撃対象は王権に連なつて干拓を主導してきた特権的大地主層であつたが、王権が打倒されるにおよんで、彼らはよりどころを失つて背景に退き、それとともに、かかる特権的大地主層に対抗するかぎりで一時的な利害の共通性に結ばれていた農民層と中・小ジェントリとの同盟の根拠は消滅し、潜在していた両者の対立が表面に浮かび上ることになる。しかも、これらジェントリはその利害を代表する独立派政府によつて全面的に支援されていたのであり、四九年以後五〇年代をつうじて、沼沢地農民層は独立派政府によつて再編成された新しい干拓カンパニー（ジェントリとブルジョアジー）およびその利益を代表する独立派政府の全権力と対立することになった。

しかし、干拓事業の再開は新たに沼沢地農民層の抵抗をよび起し、早くも前記条令の制定直後の一六四九年六月二五日、リンカンシャから「種々の人々の名による請願」が下院に送られたが、その中には沼沢地の所有者や共同権者たちが名を連ねており、多くの干拓事業の事業家が干拓と関連した利益と権利を主張したと攻撃している。⁽⁴⁾干拓事業にたいする反対運動はまずこのような請願あるいは訴訟の形で始められた。しかし、干拓にともなう紛争処理は一六四九年五月二九日の条令にもとづく紛争処理委員会で扱われたのであり、この委員会はロンドンで開かれたために請願者は事件の解決のために多くの費用と時間を費さねばならなかつた。⁽⁵⁾その上、この委員会には自ら干拓に直接の關係を持つ共和国の首脳が含まれており、干拓カンパニーの側は常に國務會議と連絡を保ち、さまざまの便宜を与えられていた。⁽⁶⁾このような条件の下で紛争処理が沼沢地農民層に有利に展開するはずもなかつた。

農民の反対運動は実力闘争に發展し、一六五〇年代初期には干拓事業の再開に反対する反乱が各地に生じた。闘争が最も激烈かつ組織的であつたのはリンカンシャであり、この州における反乱の中心は Hatfield Chase であつた。ここではすでに一六四〇年代初頭から頑強、激烈な農民闘争が展開されていたが、前記の請願によつて新たな

闘争の口火を切り、一六五〇年には四〇年代の反乱の中心であった Epworth Manor で再び反乱が生じ、例のように、干拓地の垣が破壊され、干拓者の家畜が放逐された。⁽⁷⁾ この反乱は、四〇年代の反乱の指導者であった弁護士ノッデルが引き続き指導していたが、さらに、この時期には平等派の指導者ジョン・リルバートンとワイルドマンの直接の指導と援助を受け、その結果、反乱の要求が政治的性格を帯びるようになったことがこれまでとちがっている。⁽⁸⁾ 例えば、一六五一年、当地の住民は財務府 Exchequer や議会の命令に従うことを拒否し、住民の一部は彼ら自身が「もっとよい議会をつくることができる」と主張し、また或者は現議会を「ぼろぎれの議会」(a parliament of clouts と称し、「この議会がわれわれに敵対するならば、これに抵抗するために全力を結集するだろう」)とのべている。⁽⁹⁾ さらに前記ノッデルは、リルバートンを加えた新しい議会を早急に召集するよう主張している。⁽¹⁰⁾ それは、反乱の要求がこれまでの共同権擁護の要求から一般的政治的改革の要求に発展し、干拓反対闘争が局地的経済的闘争から目的意識的な権力闘争に発展しかけたことを示している。かかる意味において、五〇年代の Epworth Manor の闘争はこれまでより質の高いものであった。が、客観的情勢はこの闘争の発展にとてきわめて不利であり、農民層の利益を代表すべき唯一の強力な政治勢力であった平等派の運動はすでに潰滅し、これに踵を接して現われた真正平等派 Diggers の運動も独立派政府の徹底的な弾圧を受け、萌芽のうちに圧殺されるという状況であった。おそらく、平等派の指導者が Epworth Manor の闘争に直接参加したのはこの闘争に依拠して頽勢を挽回しようという最後の努力を示すものにはかならず、実際、闘争の指導者ノッデルはこの地域の共同地が回復された後に隣接するヨーク州南部に闘争を移すことを企図したが、⁽¹¹⁾ それ以上に発展させることはできなかった。他の地域の状況を見ると、反乱の中心はケンブリッジ州の Burwell, Block, Rich, Botsgham, Sweifgham, Little Sweifgham 等の諸村落、ノーフォークの Stoke, Wirgham, Bretton 等の諸村落であり、⁽¹²⁾ これらの地域の闘

争も武装蜂起と干拓施設の破壊をとまぬ激烈な形態をとり、或程度の組織性をもっていたが、Epworth Manorの場合のような闘争の質の発展はみられず、また、これらの闘争が結合されることもなく、結局、地方的な一揆の域を越えることができなかった。かくして、四〇年代の農民闘争にみられた地域的分散性は五〇年代においても克服されず、Epworth Manorを拠点として権力闘争を発展させんとする平等派指導者等の最後の努力も空しく終ることになった。結局、沼沢地農民層は孤立分散してジェントリとブルジョアジーの全権力と闘わねばならなかったのである。

これにたいして独立派政府は、一方では干拓事業にたいする農民の不満に合法的なはけ口を与えることによって反抗を鈍らせようとし、他方では武力的弾圧を強化して農民闘争を圧殺しようとした。¹⁴ かかる弾圧によって五〇年代後半には農民運動の勢はやや弱まったが、農民の抵抗はやまなかった。例えば一六五六年四月一五日付のHatfield Chaseの近くに住むフランス、オランダの新教徒からクロムウェルに送られた請願は、この年一月二二日、Epworth Manorのノッデルその他の反乱者が教会を破壊し、脅迫したと訴え、同じ年十二月、下院は、「Epworth, Belton, Butterwickの村民および他の種々の人々、リンカン州のEpworth Manorの自由保有農と共同権者」からの請願と「ヨーク州、リンカン州、ノチンガム州の諸州にまたがるHatfield Chaseにその価値と重要性のゆえに土地を購入した六〇人のジェントルマンおよびEpworthとMistertonのマナーの住民の野蛮にして残酷な反乱の結果、その財産を奪われた二〇〇人の保有者」からの請願を紛争処理委員会に委託した。¹⁵ さらに、一六五九年には、リンカン州南部から三月二日付と六月二九日付の二つの請願が下院に送られている。¹⁷ また一六五七年六月二六日の干拓事業の擁護に関する布告では一六五四年五月二五日の干拓施設破壊にたいする刑罰強化の布告が改めて確認されている。¹⁸ これらのことは五〇年代後半に入っても干拓反対の農民闘争が執拗に続けられたことを示

すものである。しかし、全体としてみれば、孤立した沼沢地の農民闘争は退潮の道をたどったものといえよう。

注 (1) この点について、簡単に、武暢夫「イギリス革命における農業問題の特質」——『社会経済史大系』Ⅳ所収——を参照。

(2) C. H. Firth and R. S. Bates, *Acts and Ordinances of the Interregnum*, vol. I, pp. 130-139. アルハンゲリスキー『農民運動』二五四～二五六ページ、Darby, *The Draining of the Fens*, pp. 67-69 等を参照。

(3) この法令の対象となった干拓事業の範囲はサフォーク、ケインブリッジ、ハンチンドン、ノーサンプトン、リンカンにたる約九五〇〇エーカーの地域である。すでに三〇年代に当地域では先代ベドフォード伯の主導のもとに干拓が行われていたが、革命によって中断していたのを息子ウィリアムが復活しようとしたのであり、事業の株主の中には三〇年代の事業に参加した一四人のもの、株主およびその後継者がそのまま含まれていた（前稿二二ページ、本稿一七～一八ページ、注(8) Darby, *The Draining of the Fens*, p. 67, n. 2 参照）。

(4) アルハンゲリスキー『前掲書』二五九ページ。

(5) 同右、二五六ページ。

(6) 例えば、一六五一年には対スコットランド戦争の捕虜が、五二年には対オランダ戦争の捕虜が干拓事業の労働者として利用されてゐる (Darby, *The Draining of the Fens*, p. 76 参照)。

(7) (8) (9) アルハンゲリスキー『前掲書』二五九ページ、James, M., *Social Problems and Policy during the Puritan Revolution 1640-1660*, p. 127.

(10) アルハンゲリスキー『前掲書』二六〇ページ。

(11) 同右、二六一ページ。

(12) 同右、二五七ページ。

(13) 同右、二五八ページ。

(14) 一六五三年五月三十一日、国務会議は干拓カンパニーにたいして不満をもつ農民の請願を審査し、請願者を喚問し、この問題に関する判決が下される手続をとることを決定し、六月末には請願を審議する下部委員会を任命した（アルハンゲリスキー『前掲書』二五七ページ）。

(15) 国務会議は、Hatfield Chase の反乱にたいして一六五三年八月三十一日の布告において軍隊を派遣して干拓カンパニーを

援助すること、および、ヨーク、リンカン、ノチンガム諸州の地方の裁判所に反乱の責任者を所罰せしめることを決定し、アルハンゲリスキー『前掲書』二六〇ページ)、また、ケインブリジ州とノーフォークの反乱にたいしては鎮圧のために騎兵隊が派遣された(同上、二五八ページ)。

(6) アルハンゲリスキー『前掲書』二六一ページ、James, *op. cit.*, p. 127, Lord Ernle, *English Farming Past and Present*, p. 119.

(7) アルハンゲリスキー『前掲書』、二六二ページ。

(8) *Firth and Bates, Acts and Ordinances of the Interregnum*, vol. I, pp. 899~901, 1131, アルハンゲリスキー『前掲書』二六一ページ。

Ⅲ 王政復古(一六六〇年五月)以後

ごく一般的にいえば、王政復古は復活した国王ならびに旧貴族とブルジョアジーおよびジェントリの二つの勢力の妥協が成立し、従来の支配勢力がすべて結集され、地主・ブルジョアジーの支配体制がさらに強化されたことを意味する。これにたいして、五〇年代末における独立派支配体制の動揺とともにイギリス人民の運動は最後の盛り上りを見せ、王政復古後も継続したが、このときすでにこの運動を指導すべき革命的政治勢力はなく、分散した闘争を続けるほかなかった。

このような政治状況の変化は、当然、沼沢地の情勢にも影響してゐる。すなわち、六〇年代においては復活した上院が再び干拓事業の推進と農民運動弾圧の先頭に立った。上院は王政復古直後の六〇年九月一四日に *Great Fen* 干拓事業の防衛に関する特例法を制定し、さらに、六一年五月一九日には *Great Fen* の干拓者の要請に応じて特別決定を行なった。その要旨は、(1) 当該の低地 *level* とこれに隣接する地域でのあらゆる暴力、反乱、集会、および干拓施設の損傷の禁止、(2) ベドフォード伯とそのカンパニー、事業家 *avanturist*、および代理人のために *Great*

Fenとその干拓施設を認証すること、(3) 上院はこの決定が国王の権利を侵害するものでないことを確認すること、(4) すべての市長、州長官、ベイリフ、警史 constable 等はこの布告にもとづいて平和を維持し、前記の土地の「平穏な領有」を確保すべきこと等である。⁽¹⁾ こうしたことは、上院が五〇年代の Great Fen の干拓事業を重視し、事業の援助のために全政府権力を結集しようとし、また、干拓に関してはジェントリ・ブルジョアジーと国王の双方の利害に配慮したことを示している。これにたいして、農民層の利害については何らの考慮も払われていない。さらに、一六六三年には「全般的干拓条令」the General Drainage Act が制定されたが趣旨は同様である。かくして、干拓事業にたいする王政復古政府の政策は独立派政府の政策に国王の利害に関する配慮をもちこんだものにならず、ここに三〇〜四〇年代にみられた領主階級内部の対立はひとまず消滅したものであるといえる。それゆえ、六〇年代の干拓事業においては従来のすべての支配階級およびこれを支援する国家権力と沼沢地の農民層とが対立することになった。

しかし、沼沢地農民層の抵抗はやまず、干拓にたいする反乱はまず前記の Great Fen の一部を成すリンカン州の Hatfield Chase に生じ、やがて干拓事業の再開されたリンカン州の Wildmore Fen、ハッチンドン州の Somersham 等にも起った。Hatfield Chase の反乱は、六〇年九月に前記の Great Fen の防衛に関する上院布告が出された点からみて、おそらく王政復古後まもなく起ったものと思われる。六〇年十二月二〇日、当地の農民は干拓事業に関する紛争処理委員会に紛争処理のための裁判期間の延長を要請したが、委員会はこれを拒否し、「双方の権利が法律に従って決定されるまで、現在のまま干拓事業の参加者が土地を平穏に領有」すべきむねの布告を出した。⁽²⁾ それは、事実上、紛争の審議を放棄して干拓者の土地所有を認めるものであり、それとともに、上院はヨーク、リンカン、ノチンガムの諸州の長官と治安判事に反乱にたいする予防措置をとるよう通告し、武力弾圧の用意を整

えたのである。⁽⁴⁾ 他方、ベドフォード伯とそのカンパニーは、六一年五月初頭、上院に請願を提出して、五月二九日まで九五〇〇エーカーの干拓地を与え、干拓者の権利を確認する条令を制定し、干拓施設の破壊を鎮圧するように訴えた。これに対する回答が前記六一年五月一九日の上院の特別決定であり、その内容が干拓者の要請を全面的にみたすものであったことは前述したところから明らかである。ところが、干拓者側はその直後の五月二四日に同様の請願を送り、さらに、翌六二年三月七日に再び上院へ請願を送って、大規模な反乱の生じたことを訴えている。⁽⁵⁾ そこで、その三日後、上院は二四人の反乱指導者を追及し、ヨーク、リンカン、ノチンガム諸州の長官と治安判事に反乱を鎮圧する措置をとるよう通告し、⁽⁶⁾ 同年五月には逮捕者を釈放するという懐柔策をとり、手段をつくして反乱を鎮圧しようとした。これらのことは当地の反乱がかなりの規模と激烈さをもっていたことを示している。その後の経過は明らかでないが、七〇年にいたって当地における共同権者と干拓者の紛争解決のために困込問題に関する特別委員会を設置するむねの決定がなされており、⁽⁷⁾ ここでは六〇年代後半にもなお農民運動が継続していたことが推察されるのである。

Wildmore Fenでは六三年初に反乱が起ったが、上院は六月三日の布告をもってこれに対応しようとした。その趣旨は、紛争当事者の一方である干拓者すなわち国王とその借地人の権利が現在の権利にもとづいて合法的な会議によって決定され、国王の要求とその権利の性格によって損害を受けることが判明した者すなわち農民層についてはウェストミンスターの国王裁判所の一つに訴えることができるということである。⁽⁸⁾ しかし、それによって農民が有利な解決を与えることは実際には不可能に近く、それは何ら農民にたいする救済措置にはならなかった。ハンチンドン州の Somersham ではすでに三五年に干拓事業が行なわれ、一二五エーカーが困込込まれたが、四〇年

代初期の農民運動において奪還され、共同地に転化されていた。⁽⁹⁾ 六二年四月二八日の上院布告は当州の長官と治安判事に破壊と反乱を停止させるよう命令しており、この頃すでに反乱が生じていたものと思われる。翌六三年三月一三日、ジェントルマンの Benjamin Rolt が上院に提出した陳述によれば、上院布告はまもられず、新たな反乱が生じたといわれ、⁽¹¹⁾ ここでも農民の抵抗が激しかったことが推察される。しかし、六〇年代後半になると、前記の Hatfield Chase の場合を除いては、沼沢地における反乱の記録は今のところ見いだされず、六〇年代末には沼沢地における農民運動はほぼ終熄したものである。けだし、すでに地主・ブルジョアジーの権力が確立されていた以上、孤立した農民運動の敗北も当然の成り行きであったといえよう。

しかし、その後の干拓事業の進行は必ずしも順調ではなく、⁽¹²⁾ また、革命期の農民運動によって農民が奪還した干拓地がそのまま共同地として維持された事例も数多く見いだされる。⁽¹³⁾ それは、一つには当時の干拓が干拓技術と農業生産力の十分な発展に裏づけられなかったがゆえになお定着するにいたらなかったこと、⁽¹⁴⁾ また一つには、敗北したとはいえ長期にわたる頑強な農民の闘争が一定の成果をおさめたことを示している。当地域において干拓と囲込が本格的に進行するのはようやく一七六〇年代から一八一〇年代にかけてであり、⁽¹⁵⁾ そして、当地域に適合した近代農法が定着し、イギリスでもすぐれた農業地域としての地位を獲得するのは一九世紀後半をまたねばならなかった。⁽¹⁶⁾ しかも、この最後の時期においても当地域ではなお自作農の比率が高く、また、借地経営と自作経営の間で経営規模は殆んど変るところはない。⁽¹⁶⁾ こうしたことは、三〇〜六〇年代の干拓にみられる土地所有関係の暴力的変革Ⅱ農民からの土地収奪も直ちに資本主義的農業経営の一般的発展に結びつくものでなかったことを示すものであらう。

注

- (1) アルハンゲリスキー『前掲書』二九四ページ。
- (2) 一六六三年の「全般的干拓条令」は前述の四九年五月二九日の「Great Fenの干拓に関する条令」を明確に再確認する手続はとっていないが、暗黙のうちにその規定を承認したものとされる (Darby, *The Draining of the Fens*, p. 78)。
- (3) アルハンゲリスキー『前掲書』二九五ページ。
- (5) (6) 同右、二九六ページ。
- (7) 同右、二六二ページ。
- (8) 同右、二九七ページ。
- (9) Darby, *The Draining of the Fens*, p. 64 n. 3.
- (10) (11) アルハンゲリスキー『前掲書』二九八ページ。
- (12) 王政復古以後の干拓事業としては前述のもの以外には一六六六年の法令で認可されたマンチエスタ伯による Deeping Fen の干拓をみるのみであるが、これも参謄たる結果に終わったといわれる (Darby, *The Draining of the Fens*, pp. 81, 145, Thirsk, *English Peasant Farming*, p. 127)。
- (13) 例えば、リンカン州南部の Spalding Manor では革命前に国王に割当てられた三四〇〇エーカーは一七一〇年におよぶもお農民の手にあり、州北部の Axholme では農民は若干の土地を返還したが、七〇年代に入ってもなお以前の共同地にある穀物を破壊しており、また、州東部の Lindsey Level では一六七八年においても沼沢地住民は四〇年前に干拓者に割当てられた土地を占有し、干拓者の失地回復の要求は一八世紀に入ってもはたされなかった (Thirsk, *English Peasant Farming*, pp. 126~127)。
- (14) 「前稿」二三~二四ページ参照。
- (15) Grigg, D., *Agricultural Revolution in South Lincolnshire*, Cha. p. VI & VII を参照。
- (16) *Ibid.*, Chap. V & K を参照。

三、結 び

イギリス革命期の東部沼沢地における干拓反対の農民運動は革命前のこの地域における農民経済のブルジョア化と領主経済のブルジョア化が相互に対立しつつ進行した結果として必然的に生じたものであり、この農民運動をめぐる階級関係はまさにイギリス革命全体の階級関係に照応するものであった。それはイギリス革命における諸党派の権力闘争も革命までのイギリスに生じていた社会経済的矛盾の政治的表現に他ならないことを示すものといえよう。しかしながら、この運動は革命期の権力闘争に直接的には殆んど結びつくことができなかった。沼沢地の農民層は、国王およびこれに連なる特権的大地主層と激しくたたかざりにおいて絶対王制打倒闘争の一環を成し、革命の遂行に一定の役割を果たしたといえるが、四〇年代においてはなお共同権回復の要求に踴躍し、それが権力奪取の闘争と不可分の関連にあることを認識するにいたらず、四〇年代末の平等派と独立派の決定的な権力闘争に結びつくことができなかった。農民運動がこのような段階にとどまっていた原因は、沼沢地農民層の意識の低さもあることながら、彼等を指導し、組織すべき唯一の有力な政治勢力であった平等派の性格と力量不足にも求められねばならない。五〇年代に入つてようやく沼沢地の農民運動は平等派と結びつき、政治的性格をおびるにいたったが、このときすでに平等派は殆んど潰滅したに等しく、農民運動が強力な政治闘争に発展する道はとざされていた。結局、孤立した農民運動は地主・ブルジョア政権の弾圧に屈せしめられる他なかったのである。

しかしながら、干拓に反対する農民の反乱が鎮圧され、干拓事業の進行を阻害する大きな障害がとり除かれたにもかかわらず、一八世紀後半にいたるまで干拓と囲込は本格的に進行しえず、また、当地域における近代的農業経営の発展はさらに一世紀おくれることになった。それは、沼沢地農民層がなお陰然たる抵抗の余力を残し、共同権

を頑強に保持していたことによるものともいえるであろう。だが、そうした事情は認められるにしても、すでに強固な地主・ブルジョアジーの権力が成立している以上、必要とあれば、農民からの収奪はいつでも可能なはずである。それゆえ革命後の沼沢地における農業の発展が右のような経過をたどったのはまた別の観点から説明されねばならないであろう。それは今後さらに追求されねばならない課題であるが、さしあたり、次の点を指摘しておくたい。すなわち、土地所有関係の暴力的変革Ⅱ農民からの土地収奪は資本主義的農業経営発展の一つの有力な前提条件ではあるが、決定的な要因は農業生産力の発展に求められねばないのであり、沼沢地の場合にはその特殊な自然的条件もあって資本主義的農業経営の基盤となる生産力の発展の立ちおくれのために三〇〜六〇年代の干拓に示される土地所有関係の暴力的変革も貫徹されえなかったのである。そして、この問題は東部沼沢地という特殊な地域の問題にとどまらず、政治的変革と経済的発展の関連の問題として一般的に重要な意味をもっているように思われるが、この点の全面的な検討は今後の課題である。